

第七章 門徒の仏事

葬儀・法事・月忌
172

在家報恩講
176

仏前結婚式
178

初参り
180



葬儀・法事・月忌

葬儀

時代とともに生活の仕方が大きく変わっていききましたが、葬儀のやり方も大きく変わっていききました。

平成になってすぐ宇佐市にも葬祭場ができました。その頃は、多くの地区に祭壇組合があり、隣保班が利用できていましたし、隣保班（地区によっては講合）が親身になって、しかも無償で葬儀の手伝いをしていました。だからお金のかかる葬祭場を利用する人などいないだろうと思っていたのですが、十年もすると葬祭場での葬儀が主流になっていきました。何でそうなったのでしょうか。

家での葬儀は、家の者が死者に寄り添えるよう、通夜から葬儀までの一切を隣保班の者が取り仕切るようになっていました。そのために隣保班からは、家ごとに男一人と女一人が仕事を休んで手伝いにでることになっていました。

死者の知らせが入るとすぐ駆けつけ、男性陣は、家を片付け、祭壇を組み、飾りものを造りました。葬儀当日は、受付や司会もしました。

女性陣は、米や野菜を持ち寄って、親戚や手伝いの人々の分まで食事を作りました。だから葬儀にお金はかからず、ご香典で初盆の用意ができたとも聞いています。

それが葬祭場ができるや、隣保班のする仕事は受付だけになり、祭壇の用意はもちろんのこと、お斎や司会等も葬祭場がするようにまりました。もちろん、そのすべてが費用として請求されることになるのですが……。

そのようにお金がかかっても、雪崩を打つように葬祭場になっていったのは、助け合いを必要とした農村共同体が衰弱していたことと関係しているのではありません。田植え機や稲刈り機ができ、お互いに助け合う必要がなくなっていきました。さらに、農業では生活できず、誰もが会社勤めをするようになり、隣保班の葬儀のために仕事を休むことが難しくなっていたということもありましょう。こんなことが背景となって、助け合いではなく、お金で済ます葬儀となっていったのでしょうか。

これは私の知っている昭和四十年頃から平成十年頃までのことですが、それ以前はもっと濃密に、それこそ村中あげて葬儀を行っていたようです。

昭和初期の葬儀の写真がいくつか手元にありますが、それを見ると、祭壇はお寺の境内や野辺に造られていますし、斎場に行くまでの行列（野辺送り）がたいへん賑やかです。また僧侶が何人も参列しているし、女性は白い布を頭に被っており、男性は羽織袴姿です。花輪や幟が

あり、子どもの姿も散見されます。広々と解き放たれた天地の中、村中総出で葬儀を執り行ったようです。

昭和4年 山本武蔵氏葬儀



野辺の送り



お内仏での出棺のお勤め

昭和14年 中園為市氏 葬儀



東別院境内での葬儀



家から葬場(別院)までの野辺の送り



昭和42年 中園リキさん 葬儀 野辺の送り



昭和9年 院内町原口 中園キヲさん 葬儀



中園リキさん
勝福寺本堂での葬儀



チンタオ
戦前 中国青島(?)での葬儀の様子

戦後、火葬場が遠くなったこともあって、野辺送りはなくなり、替わって、家の中に祭壇を組んで葬儀をするようになりました。



葬儀に先立ち、お内仏に向かって出棺勤行



多くの地区で「祭壇組合」が作られ、自分たちで運用していました。



襖、障子はずしても、家の中は狭く、曲録に座る導師や近所の僧侶、それに身内の者で、足の踏み場もないような状態でした。友人、知人、会社の同僚、それに近所の人たちは、外からお参りをしました。雨や雪、それに真夏の日照りなど、難儀なことも多かったけど、「ほとけさまのことだ、仕方がない」と、誰も文句を言いませんでした。



法事

弘道の時代、ご法事では浄土の三部経（『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』『仏説阿弥陀経』）があげられていました。時間は朝の九時からで、二回の休憩を挟んで、お昼まで。父は話し好きだったから、おしゃべりも多かったと思います。それにしても長時間でありました。

私が父に代わってご法事を勤めだした頃、「お経はお坊さんの仕事」という感じで、家によつては大きな声で雑談したり、二巻目が始まると、連れだつてお墓参りに行ったりしました。それではおかしいので、少しずつ変えていき、今は十時三十分から始め、まず『仏説無量寿経』をあげ、皆にお焼香して頂きます。それが済むと一度、休憩して、休憩後は皆で「正信偈」をあげ、最後に法話をさせて頂いています。

ご法事の後はお齋となりますが、私たちも特別な事情がない限りお齋につき、皆さんと親しくさせて頂いています。

お齋についていえば、昔は仕出しをとり、ゆつくりと酒を酌み交わしていました。私は酒を飲めないのですが、言い訳はゆるさねず、形だけでも受けなければなりません。今は飲酒運転の罰則が厳しくなり、酒の無理強いがなくなりほっとしています。お酒がなくなり、お齋の席が弾まなくなつたような気がします。また、最近では料亭などにお齋の席を設ける家が

増えてきました。グルメの時代となり、お齋の料理が格段によくなつてきたのも大きな変化であります。

以上は私の経験した範囲のことですが、一昔前は、前日の夕に速夜のお経をあげ、翌日の午前、午後とお経が続く、そんな一日がかりのご法事だったようです。その名残が、三部経が一巻終わるごとに、お仏飯を変える習わしであると聞きました。

また、仕出しを取るようになる前は、家の者がお齋を手作りしなければならず、親戚中が帰ってくるということもあつて、母家を継いだ長男のお嫁さんのご苦労は大変なものでした。

こうして振りかえってみると、ご法事もお葬式と同じで随分と簡略化されてきていますね。

月忌

故人の月命日にお参りすることを「お月忌（参り）」といい大切にされてきました。父は

「法義」を説くよりもお月忌を大切にすると「月忌坊主」を自認していました。若い時はさておき、四十歳を過ぎた頃からは「仏さんが待つている」と、せつせ、せつせとお月忌参りに行っていました。五十を過ぎて車の免許を取つたのですが、それまでは雨でも雪でも自転車をお月忌参りに行っていました。休みは正月元旦

だけでした。

私が住職になってからは、八月はお盆参りだけとし、二月は在家報恩講としました。また、暮れと正月の三が日はお月忌を休ませてもらうことにしました。

それから、昔は人が亡くなるたびにお月忌も増え、ひと月に何回もお月忌のある家がありました。したが、私の代となつてからは、原則として、ひと月に一回にしてみました。ただし祥月命日のある時は、その日にお参りをしています。

お月忌について勝福寺で大切にしていることは、前日に電話をかけ、お参りの時間を打ち合わせすることです。なかなか面倒なことなのですが、電話で約束することで、ご門徒さんにも「いつ来るのやら？」と待たずにすむし、一緒にお経をあげることが出来ます。

お月忌の時にあげるお経ですが、昔は『仏説阿弥陀経』（小経）をあげていました。同朋会運動が盛んになった頃から「同朋唱和」といって、親鸞聖人がおつくりになつた「正信偈」を一緒にあげるようになりました。

それから、お経の後に「御文」を拝読するのが習わしでしたが、今は、「御文」だけでなく『歎異抄』の一節を拝読したりしています。

こうしてお経が終わると、後はお茶を飲みながら四方山話をし、時には、お野菜などを頂いて帰ってきます。

若い時は気が重たかつたお月忌も、歳とともに、いいもんだなと思うようになりました。

在家報恩講

浄土真宗はお寺にお参りするだけでなく、何軒かの家族が集まって、一緒に食事をし、ご法話を聞く「お講」(在家報恩講、女人講、若講など)を大切にしてきました。そのような、みんなが集まってするお講も時代とともに廃れていきましたので、お寺からあえてお願いして、家ごとに「在家報恩講」を勤めさせていただいております。皆さんに「在家報恩講」をお願いした時の文章を載せておきます。

報恩講とは

皆さんのおうちには立派な仏壇がありますね。それを何と呼んでいますか？ たぶん「お内仏」と、呼んできたことと思います。

では、なぜ「お内仏」というのでしょうか？ それは、立派なお仏壇に「南無阿弥陀仏」のお名号をご安置して、一家の御本尊とさせていただくからであります。我が家に御本尊をお迎えすれば、お寺に行かなくても、朝夕、手を合わせることができます。そういうわけで、真宗

門徒は他の宗派には見られぬ程の立派なお内仏を一軒一軒ご安置してきたのです。報恩講はその御本尊をおまつりする最も大切なおまいりです。

恩徳讃のこころ

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
骨を砕きても謝すべし

お寺の法座で必ず歌われるこの恩徳讃は、皆様もすでにご存知のことと思います。これは浄土真宗の開祖、親鸞聖人のおつくりになられた歌であります。

私達は、かりに一億円という大金を手に入れたとしても、あるいは百才まで生きたとしても決して満ち足りることはありません。私達はそんなことぐらいでは満足できぬほどの深い心を生きているのです。念仏の教えは、そうした私達に、はじめて深い満足と寂かな喜びを与えて下さいます。利益ということでは、これ以上の御利益はないでしょう。だから親鸞聖人は恩徳讃において、如来のご恩は「身を粉にしても、骨を砕きても」報ずべし、と歌われたのだと思います。

御正忌・報恩講

その親鸞聖人は、今から七百五十五年前の十

一月二十八日になくなられました。「御伝鈔」には「ついに念仏の息たえましましおわりぬ」と伝えられております。それ以来、真宗門徒は親鸞聖人の御正忌(祥月命日)である旧暦十一月二十八日によせて、如来の御恩を報謝する報恩講を勤めてきました。

皆さんに親しまれてきた「お取り越し」も四日市別院の報恩講なのです。勝福寺でも毎年、翌年の一月にお勤めしてきました。

在家報恩講を勤めましょう

こうして、ご本山、四日市別院、勝福寺とすんだ後、最後は、ご門徒の皆様のうちの報恩講となるのです。昔ほどの家でも報恩講が勤まっております。現在(平成三年)では、勝福寺のご門徒のうち約半分が報恩講を勤めておりますが、残りの半分では報恩講が勤められておりません。これは本当におかしな話であります。

先程も申したように、お内仏はその中心に仏さま(「南無阿弥陀仏」のお名号あるいは阿弥陀如来の木像か絵像)をご安置しております。報恩講を勤めないということは、最も大切な仏さまを一年に一度もおまつりしないということになります。それでは結局、お内仏がご先祖の位牌を入れておく箱になってしまわないでしょうか。御本尊といっても、単なる飾り物になってしまわないでしょうか。まことにもって勿体

ないことでもあります。

これでは、日々の生活のなかにあつて縁きたればいつでも欲に眼が眩み、怒り身を焦がし、自尊心に身を裂かれてしまう私達が、どうしたら本當の自分に帰ることができるのか、その道を仏さまにお尋ねする気にならぬでしょう。あるいは死期の近づいたことを予感したとき、仏さまに自分の心細さを聞いていただこうと思えないでしょう。

たぶん今日では、仏さまなど、どうでも良いのかもしれませんが。あるいは信じられないというところかもしれません。

しかし私は思います。三千年の歴史をくぐった仏教の智慧は、たかだか百年の歴史でしかない私たち現代人の知恵よりもはるかに深く、はるかに優しい。

もし皆さんに、ご先祖が念仏の教えを伝えてきたことに敬意をおもちになるならば、まずご先祖のまねをして、皆さんのうちでも報恩講をお勤めしてください。報恩講をお勤めすることが、仏さまに近づく第一歩であります。

報恩講のおかざり

報恩講はお内仏に御安置している仏さまを礼拝する最も大切な儀式です。だから最高のおかざりをします。内敷を掛け五具足（両側に花瓶、あいだに灯明、真ん中に香炉）のおかざりをし、おけそくもちをお供えします。もちろん仏具はお磨きいたします。

みんなで『正信偈』をあげます

お勤めは坊さんの仕事、と思っている方がいないでしょうか。そうではありません。お勤めは、仏さまと坊さんと皆さんの三者がそろって、はじめてお勤めになります。だから、できるだけ家族みんなで、お勤めを致しましょう。お勤めは『正信偈』をあげます。ご和讃は恩徳讃を含む六首、それに『お文』です。（『響流』22号）

座元を無事おえて

外園 みつえ（常德）

今年の御正忌・報恩講には、家の都合でお参りのご縁を失って大変残念に思いましたが、常德上組八軒の報恩講の座元にあたり御座をつとめさせていただきました。

昨年までは餅米を持ち寄りお華束をついてお供えしたのですが、時代の変化で皆忙しく、少し簡単にしてお茶菓子講に決めました。

二月十九日の夜七時半から十時まで寒いなか皆さんが集まって、ご住職の読経にあわせてお正信偈をあげました。それから法話を聞いて報恩講の大切さを痛切に感じました。お内仏のお給仕やぶだんのお参り等、今までは惰性で行なっていた私が反省させられ恥ずかしく思われました。

勝福寺の御正忌での講師の先生のご法話の一部をお話くださったり、座員の幼少の頃の思い出話に花が咲き和やかな集いでした。

毎日の多忙さでゆっくり顔を会わず機会の少ないこの頃、仏さまのご縁で、一年に二度お講（冬の報恩講とお盆の翌日の無縁供養）が開かれることを楽しみにしております。つとめて聞法に励みたいと思うこの頃です。（『響流』24号）

昔の在家報恩講

私が大谷専修学院をやめて勝福寺に帰ってきたのは昭和六十年のことでしたが、その頃はまだ、院内、深水、山本、常德地区で在家報恩講が勤まっていました。

はじめに一軒一軒お内仏に参り、その後、毎年交代する座元の家を集まって、一緒に正信偈をあげ、ご法話を聞き、お茶菓子をいただきながら座談をしました。特に懐かしいのが深水地区で、いつ頃からか女人講となっており、お寺が買って持っていく牛肉で焼き焼きを作って食べていました。卵酒もあり、ご法話も上の空だったかもしれませんね。

また常德の上地区は、前日にお華束餅をつき、お内仏にお飾りをしていました。こうして座元に集まって法座をもつ在家報恩講も、みんなが給料取りになり農作業を助け合うこともなくなり、核家族化が進み、他人の家に深入りしなくなつたというようないきましました。

仏前結婚式

結婚式といえば、神社での神前結婚式や、教会での結婚式を思う人が多いようです。一方、お寺といえば、葬式や法事などのイメージが強いようです。しかし、お寺での「仏前結婚式」は神前式が始まる前から行われていました。

仏前結婚式では、感謝と誓いが中心になります。

二人が出会い結ばれることになったことは、自分達二人だけの力ではありません。ご両親をはじめ、多くの方々のお育てあればこそです。結婚式にあたって、そのことを心に深く刻み、感謝します。

それから、育った環境が違ううえに、わがままな人間同士が一緒になるのですから、明るい家庭を築くことは大変難しいことです。ですから、仏さまの教えを聞いて、自分中心の思いに振り回されずお互いを尊びあっていく、そんな家庭を築いていくことを誓います。

以下、勝福寺で行った仏前結婚式をご紹介します。

式次第

- 一、参列者入堂
- 一、新郎新婦入堂
- 一、司婚者入堂
- 一、開式の辞
- 一、総礼
- 一、讃佛（嘆仏偈）
- 一、表白
- 一、司婚の詞
- 一、誓の詞
- 一、念珠授与
- 一、献華献香
- 一、式杯
- 一、乾杯
- 一、法話
- 一、讃歌
- 一、総礼
- 一、開式の辞
- 一、司婚者退堂
- 一、新郎新婦退堂
- 一、両家紹介
- 一、参列者退堂



松本信二・舞子

司婚の言葉

敬^{うや}つて 大慈大悲の阿弥陀如来の御前
に白^{もつ}こてまうせう

本日^{こんにち} ハジメテ マヤヤしく 尊前を莊嚴
し

新郎 松本信二
新婦 舞子

の婚姻の義を修したてまつる

それ 一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲
むき なお多生の縁による、とこころ
ましていわんや無量無数の人々の中から
お互いに一人をえらびて
人生の苦楽を共にせんと思い立つことは
まことにこれ み仏の導きにして
また 重々の因縁のしからしむるゝる
なり

今日よりのち 両名
常にみ仏を仰ぎつつ
自己を省み たがいに敬い
社会のご恩を大切にいただきながら
よき家庭を築いていかれんことを

時に 二〇一四年九月十四日

司婚者 響流山勝福寺住職 釋知道
敬^{うや}つて白^{もつ}す



中園利一郎・直子



矢次孝行・真由美



矢次慶和・瑞絵



藤谷信・風



藤谷直明・秀美

初参り

世間では、子どもが生まれて一カ月ほどすると、「お宮参り」をする習慣がありますが、お寺に「初参りはつまいに行く」という発想はあまりありませんね。

この「お宮参り」に代わるものが「初参り」です。「初参り式」では、赤ちゃんと一緒にご家族が、ご本尊の前で手を合わせ、仏さまに、かけがえのない尊い命を賜ったことを感謝します。そして、苦難の多い人生を、仏さまの教えを依りどころにして生きていくことをお誓い申します。

子どもの誕生は親の誕生でもあります。かけがえのない命の誕生を喜び、子育てをとおして親として育てられる歩みが始まるのです。

お東のご門徒さんは、初参り式に行くとか、かわいい念珠と慶びのお言葉の入った写真のような包みを御本山から頂けます。皆さんもぜひ、初参りに来てください。



ご本山よりの お祝いのお言葉

おめでとうございます。新しい命の誕生、そのお喜びはいかばかりかと思えます。

飲むことも、着ることも、入浴も、排泄も、何もできないあかちゃんですが、元気な泣き声を上げて、ただそこに居てくれるだけで、まわりは明るくなり、微笑みにあふれます。

何かができるとか、こんな実績があるとかではなく、ただ在ることのまぶしい輝きが、この命を何としても守っていききたいと、私たちに勇気をもたせてくれます。

思ってみれば、今日の誕生までには、私たちの想像のつかない、永い命の歴史があったので

す。お母さんがたいへんな病気の中で生み出された命もあったかもしれません。お母さんのおなかのなかにいる間にお父さんが戦死されたこともあったかもしれません。災害や飢饉もあつたでしょう。それらをくぐりぬけて伝えられた命のバトンは、想像以上に危うくか弱いものです。

だからこそ、今ここで出会えたことが、何より嬉しく、尊く、ありがたいでしょう。お父さんもお母さんも、おじいさんもおばあさんも、ご自分のお年の年月、この誕生を待っていらつしやつたのです。それだけでなく、命を伝え支えた全ての歴史と世界がこの誕生を待っていたのです。

その歴史と世界を開いてきたのは、どの命も、ひとり一人、かけがえのない存在として、尊びたいという願いに違いありません。

その願いを身に受けたことに手を合わせ、この願いを私たちの課題として丁寧に生きていきたいと思えます。この度の誕生が、そうした歩みのはじまりとなることを念じ、お祝いの念珠をお贈りいたします。





佐藤佑哉くん



中園健人くん



矢次遊凧ちゃん



矢次理恵ちゃん



渡辺凜花ちゃん



渡辺涼音ちゃん



渡辺真帆ちゃん



外園弥太郎くん



向野鈴菜ちゃん



向野由梅ちゃん



松本玲奈ちゃん



松本友樹くん



渡辺詩麻ちゃん



加藤花音ちゃん



渡辺響流くん



松本奈々ちゃん